

家族ソーシャルワークを再考する

—エンパワメント理論を基礎に—

佐々木政人

Family-Centered Social Work Practice

—Preventive Empowerment Approaches to Social Issues—

Masahito Sasaki

要旨：家族エンパワメントの実践技法

少子高齢社会の潮流は、現代家族にさまざまな生活課題との出会いを余儀なくしている。これまでの地縁、血縁による相互扶助の支援関係のみでは、その課題は解消されないほどに、問題は深刻であり複雑化している。激変する社会的潮流を背景とし、たえざる変化と変容が強要される現代家族は、はたして有効な防波堤となりうるのであろうか。家族機能の脆弱化は、世界的な規模で検証されるほど顕著な社会現象なのである。

ソーシャルワーカーをはじめとする援助専門職の果たす役割とは、弱体化する家族機能を心理・社会的に支援することにある。家族の潜在的な問題解決能力を豊かに育み、地域コミュニティが直面する社会問題に対して積極的な参画を促すことである。本稿では、現代日本の家族が、少子高齢社会にともなって生起する家族問題によりよく対応するための方策を提言するとともに、家族エンパワメントの方法と実践技法について考察する。

Keywords： 家族ソーシャルワーク エンパワメント理論 リソース

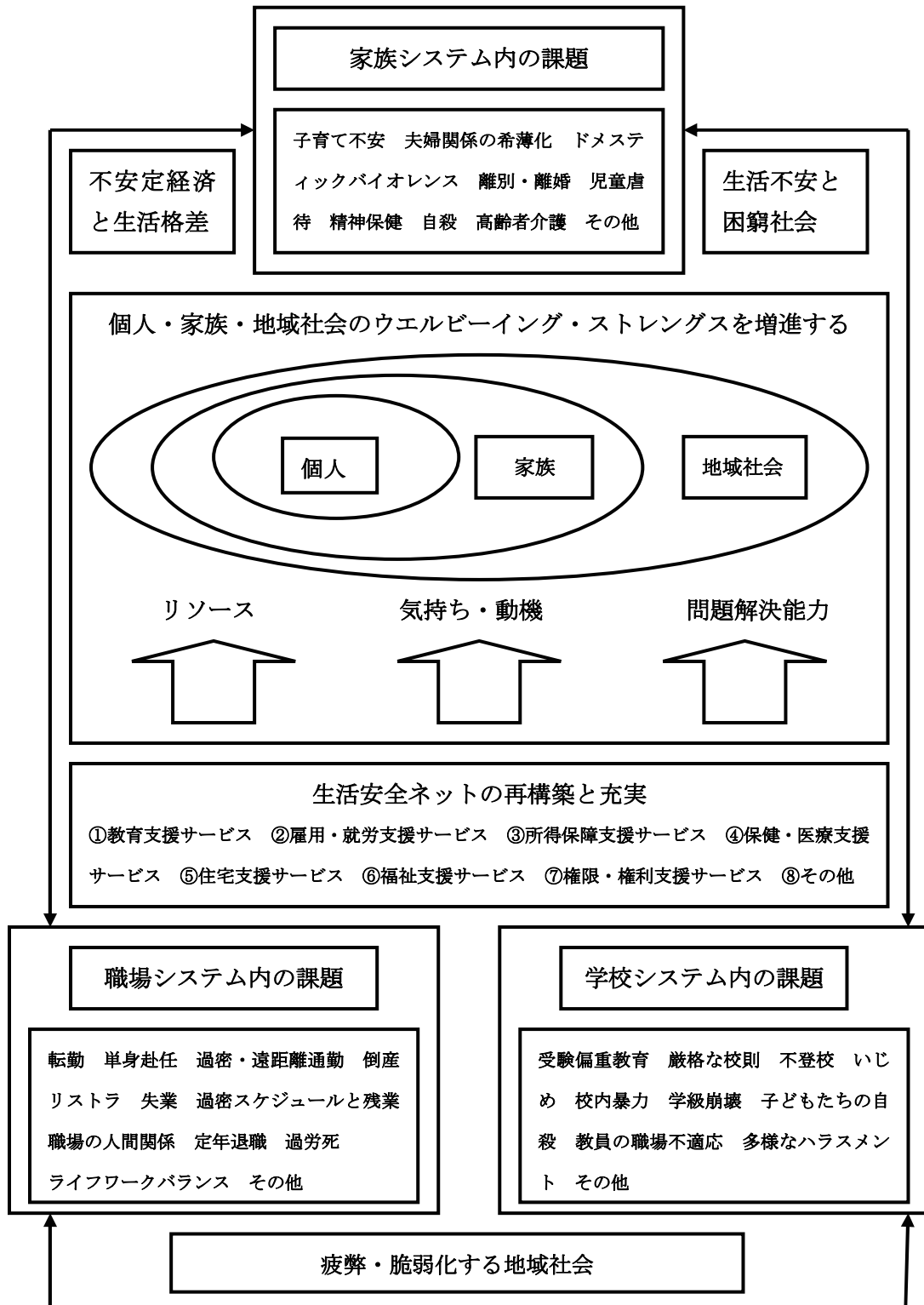
Family-Centered Social Work Practice, Empowerment Theory, Resource in Family Systems

1. 現代家族が抱える福祉課題と家族エンパワメントの必要性

今日、さまざまな生活ストレスが蔓延する現代社会において、家族が体験している課題は複雑、かつ多種多様である。図1のごとく、ライフコース論の立場からも明かであるが、現代家族が抱えている生活課題は、出産にともなう子育て不安、学校におけるいじめや不登校問題等の子供の教育・養育課題をはじめ、経済危機にともなう、職場内配置転換、リストラ、倒産など中高年層の就労及び生活不安に関連する課題、さらには超高齢社会における老親扶養や介護問題といったように、多岐にわたっている。特に、家族機能の脆弱化現象に反映される離婚、不登校、いじめ、虐待、高齢者介護によるストレス、社会的孤立、自殺など、多くの福祉課題は、援助専門職の関心の的となっている。

21 世紀における家族援助の支柱とは、家族及び社会的リソースの脆弱化、家族問題解決に対する動機の欠如、家族メンバーのセルフエスティームの低下、さらには問題対処能力の弱体化の問題である。いわゆる家族の社会的役割機能の脆弱化現象を緩和し、家族が持っている潜在的な強さや能力を引き出すための努力が必要とされている。家族エンパワメントの実践活動は、こうした時代的な要請によって、援助専門職が真摯に取り組まねばならない意義ある実践課題なのである。家族は、自らの家族問題をとおして、家族自身が持っている潜在能力を認知するとともに、問題解決のプロセスで学んだ強さと能力とを、地域コミュニティにおける豊かなリソース源とするための努力をせねばならない。成熟した共生社会は、「共働する喜び」を理想とする家族によって創造されるのである。

図1 現代社会の生活ストレス



資料：佐々木（1999）「家族エンパワメント」『エンパワメント実践の理論と技法』（p.114）中央法規及び佐々木（2012）「現代社会と子どもの成長・発達」『児童家庭福祉論』（p.42）全国社会福祉協議会をもとに一部改変。

2. 家族エンパワメントの目標

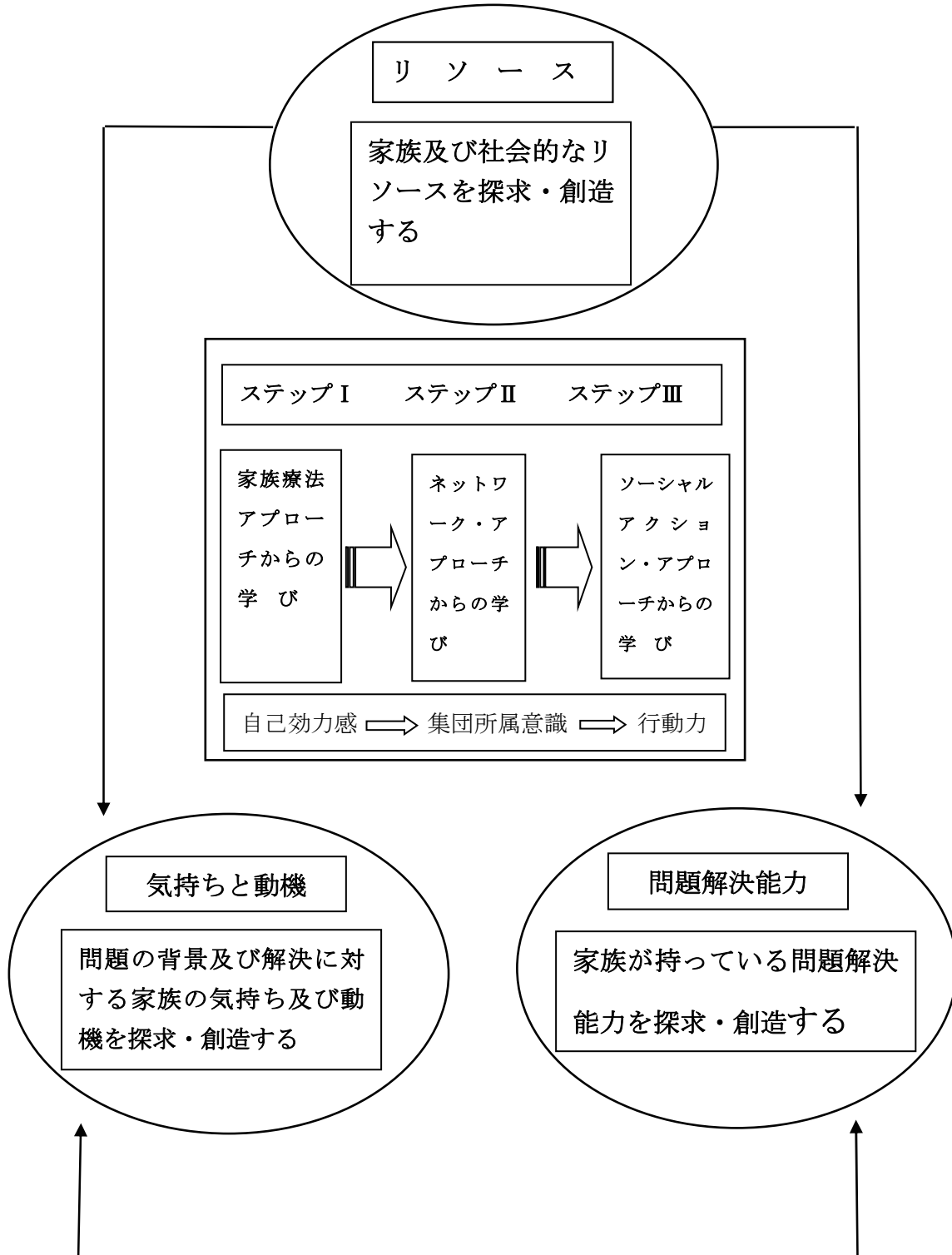
福祉実践における家族エンパワメントの重要性は、多くの実践家や研究者によって強調されてきている。特に欧米諸国を中心にその役割は、今日の社会情勢を反映して、われわれの一大関心事となっている。豊かさの中の貧困と差別は、米国を中心とする経済諸大国において顕著な社会現象である。1970年代半ば、バーバラ・ソロモンは、米国における黒人社会からの英知を「エンパワメント中心ソーシャルワーク」の実践と研究に結実させた人物である。ソロモンは、その著「黒人のエンパワメント—抑圧されている地域社会におけるソーシャルワーク」のなかで、心理社会的な偏見と差別がもたらす外的及び内的貧困化による福祉課題を明示した（小松, 1995; Solomon, 1976）。

ソロモン（Solomon, 1976）によれば、エンパワメントとは、偏見と差別が横行する社会集団のなかで、経済的にも社会的にも強制的に、社会の底辺に帰属させられている人々が、ひとりの個人として、自分自身に内在する「強さ」との出会いをとおして、より建設的で、平等なコミュニティ形成のために、そのパワーを結集させることである（Solomon, 1976; Morales & Sheafor, 1995; 小松, 1995）。家族は個人と社会の架け橋である。豊かな恵みの架け橋を育み、ウェルビーイング社会を 21 世紀の世界に構築するための福祉実践には、創造的な家族エンパワメントが必要なのである。

家族メンバーそれぞれの自己実現が、福祉実践の目標である。参加、平等、さらには信頼を基調とする生活コミュニティの実現は、家族メンバーの自己実現をとおして可能となる。すなわち、家族エンパワメントの目標とは、家族メンバーの自己実現を豊かにはかり、その結果獲得される自尊心及び自己効力感を糧として、家族メンバーが内包している潜在能力を地域コミュニティ活性化及び社会福祉リソースの充実のために駆使することである。

援助専門職と家族との連携を基本とするエンパワメント、すなわち、家族エンパワメントとは、3つの側面からの支援であるといえる。より具体的には、（1）家族及び社会的なリソースを充実すること、（2）家族メンバーの問題解決に対する動機的要因を高めること、（3）家族メンバーの問題解決能力を増進することである（Hepworth & Larsen, 1993; シメオン, 1997）。図 2 が家族エンパワメントの基本構造及び三つの具体的な実践ステップである。

図2 エンパワメントアプローチの基本構造と実践ステップ



資料：佐々木（1999）「家族エンパワメント」『エンパワメント実践の理論と技法』（p.114）
中央法規 一部改変

福祉課題の解決には、家族リソース及び社会的リソースの有無、あるいはそれらの活用が十分に遂行される必要がある。問題解決にむけてのリソースの豊かさは、家族及びその社会の成熟度に関連している。これが、第一番目の目標である。リソースとは、具体的には、経済的なリソース、実際のリソース、情緒的・精神的リソース、アドバイス・相談のリソースなどである。充実した家族及び社会生活には、これらのリソースは不可欠であるが、現代家族の多くは、こうしたリソースの恵みから家族的にも、社会的にも疎遠になりつつある。

課題発生時における問題解決のためのリソースであるべき家族や社会が、十分に機能をしえない現状は、特に 1990 年代以降、顕著となっている。これまで培ってきた日本文化の価値理想である、家族・親族システム及び地域社会システムによる相互扶助の理念は、大きな社会変化の激流に侵食されている。家族エンパワメントの重要な最初の課題及びその目標とは、こうした社会情勢を踏まえ、社会関係の崩壊現象を癒やすための支援と共生を理念とした新たな福祉リソースを地域コミュニティにおいて創造するとともに、家族内役割機能を積極的に育成することにある。

家族エンパワメントの第二の目標とは、家族メンバーの問題解決に対する動機的要因を高めることである。人間は、その一生を通して、直面しなければならない生活課題を持っている。人生における生活課題とは、出生から人生最大の課題である死にいたるまで、多種多様である。こうした生活課題との出会いによって、人間は多くの学びを体得するのである。この学びをとおして人間が獲得する成熟とは、情緒的な成長であろう。直面する問題や課題の大きさに対する戸惑い、不安に押しつぶされそうな気持ち、あるいは困難な課題に立ち向かおうとする積極的な気持ち、何かを成し遂げた充実の感情、喜びや安堵の気持ちなど、いかなる人生課題にも、さまざまな気持ちや感情が見事に共存する。家族の成熟には、家族メンバーそれぞれの人生課題に対する驚きと喜び、相互の共感をとおしての理解と学びとが不可欠である。現代日本の家族は、こうした家族メンバー同士の情緒的な交流の場を喪失しつつある。現代家族が求めているセルフエスティーム感の促進には、自己実現欲求を充足するための安定した、一貫性のある、しかも安心できる家族及び社会環境が要請される。また、家族問題の解決及びその変化に対する動機の増進には、人間＝人間及び人間＝社会との共感的交わり関係が必須といえる。

家族エンパワメントが目指す第三の目標とは、家族メンバーが持っている問題解決能力を増進することである。第二の課題と密接に連動するが、現代家族が抱えている課題とは、家族が持っている問題解決能力、すなわち、人生課題に対する課題達成能力及び問題解決能力の脆弱化に関連する問題であるといえる。問題解決に向けての、情報を的確につかみ、それを効果的に活用する能力は、課題解決の第一歩である。情報化社会と言われて久しいが、反面、情報をどこで、どのように収集したらよいか判らない家族が存在する。問題解決の情報の確保は可能であるが、その情報を積極的にしかも有効に活用しようとし、あるいは活用できない家族も多い。他方、家族メンバーとのコミュニケーションの取り方に多くの課題を持つ家族の増加も憂慮されている。夫と妻、親と子供、嫁と姑、教員と子供及びその保護者、上司と部下といったように、多くの人々が、意志の疎通をはじめ、共感や親密性の取り方、さらには適度な人間関係上の距離の取り方に苦慮している。現代家族には、家庭環境や社会生活環境上の問題を積極的に解決する上で

の柔軟性と創造性が、これまで以上に求められている。

家族エンパワメントの基本とは、前述のごとく、家族が抱える生活課題に対する有効なリソースを豊かにすること、家族の問題解決に対する意欲を増進すること、家族が持っている問題解決能力及び技能を成熟させることである。さらにより積極的に、家族メンバーのそれぞれが地域社会のリソースの創造者であり、消費者であるという意識を喚起することにある。21 世紀における日本社会のウェルビーイングの成熟には、社会的な活動に対する参加意欲の促進が不可欠である。家族エンパワメントが目指す目標とは以下の通りである（Gutierrez, 1990; 小松, 1995, pp.8—9）。

- (1) 問題に関するクライアントのとらえ方を受け入れること。
- (2) クライアントが現に持っている強さを確認し、増強していくこと。
- (3) パワーが不均衡になっている問題についてクライアントの意識を高めるようにしていくこと。
- (4) クライアントが特定の技能を発達させていけるように援助すること。
- (5) クライアントのために具体的な資源もしくは情報を収集、提供したり、必要に応じてクライアントのために弁護したりすること。

第 3 節では、こうした目標を基本に、家族内エンパワメント法、家族＝家族間支援・交流エンパワメント法、家族の社会的・政治的エンパワメント法に関するプロセスと実践技法を学ぶことにする。

3. 家族エンパワメントのプロセスと実践技法

援助専門職＝家族間の連携を基礎とする家族エンパワメントの目標は、前述のごとく、家族メンバー間の自己実現ニーズの充足を契機とした潜在的自己効力感の社会化にある。ここでは、そのプロセスを、3つのレベルから順次考察する。すなわち、家族内エンパワメント法（ステップⅠ）、家族＝家族間支援・交流エンパワメント法（ステップⅡ）、家族の社会的・政治的エンパワメント法（ステップⅢ）を取り上げる。なお、表 1 は、エンパワメント理論を構成する主要な概念規定であり、ソーシャルワーカーがその実践過程において注視すべき目標でもある（Langer, C.L. & Lietz, C.A., 2015）（参考資料：注 1）。

1) 家族エンパワメント・ステップⅠ

家族内エンパワメント法の展開過程：家族療法アプローチからの学び

家族内エンパワメント法とは、家族メンバー間のリソースを認知、変容、育成すること、家族メンバー間の気持ちや動機を認知、変容、育成すること、家族メンバー間の問題対処技能を認知、変容、育成することである。家族メンバー間でのリソース、気持ち・動機、対処技能に関する認知、変容、育成の過程を共有し、共に体験しあうのである。すなわち、家族メンバー同士が互いに持っている有用なリソースを分かち合い、人生課題を達成する過程で生起するさまざまな出来

事を喜び、励ましあったりすることである。また具体的な問題解決が必要とされる出来事に対しては、共同でその解決に当たり、貴重な実体験を通して、問題対処の能力を共に培うのである。

前述のごとく、家族内人間関係上の課題とは、夫婦間における結婚・離婚問題、子供の養育を巡る問題、子供の摂食障害の問題、不登校やいじめの問題、さらには子供の非行問題など多様である。親と子供間での虐待の問題、あるいは老親介護のストレスによる高齢者虐待の問題は、特に深刻で、早期の介入援助が必要とされるものである。家族における「個」の成長と家族メンバー間における対人関係能力の育成、さらには家族システム外との社会関係能力の開発は、家族エンパワメントの基本といえる。

家族関係の調整技法の中でも、近年着実に、家族ソーシャルワークの介入技法としての価値を認知されているのが、家族療法の技法である。家族療法は、1940年代後半から1950年代にかけて、欧米、特に米国で開発され、体系化された家族援助技法の一つである。日本でも、1980年代を契機として、児童相談所を中心に、家族問題の相談分野で、着実に根づきつつある。子供の非行問題、摂食障害、夫婦関係の調整、高齢者介護の課題を抱える家族関係の調整といったようにその応用範囲は広範にわたっている。米国をはじめ、欧米の家族ソーシャルワークは、家族援助技法の多くを家族療法の理論及び技法より学び、日々の実践活動に積極的に導入してきている。

ウィッターカーとトレイシー (Whittaker & Tracy, 1989, p. 209; 佐々木, 1996, p.164) は、家族ソーシャルワークにとって有用な家族療法の援助理論及びその技法を以下のように特徴づけ、家族内エンパワメント法の基本原理を提示している。特に、(3) 及び (4) は、家族内エンパワメント法には必須の要件である。

- (1) 個人とその環境との間の相互作用パターンに注目する
- (2) システム論的アプローチ方法をとる、すなわち、家族システム、家族構造、家族関係やその実質的な内容に焦点を当てる
- (3) 家族は問題変容のための資源を保持しているばかりではなく、家族システムそれ自身変容しえる実態として理解する
- (4) コミュニケーションの訓練、役割体験、家族造形(時間や場面を変えて家族を映像する体験)、他の家族成員とともに体験するホームワークといった「実践的なセラピー」のアプローチ法をとる
- (5) セラピストが家族に巻き込まれないように、共同セラピストを活用する
- (6) 「今ここで」の状況を中心に、現在の行動やその維持に関与している要因に焦点を当てた変容援助である

家族療法の目的とは、家族システムが抱えている構造及び機能上の課題に焦点を当て、同システム内の相互作用関係を調整しつつ、家族内の対人関係上の成長を育むことである。家族内リソースの促進や具体的なコミュニケーション技法の体験学習などの方法は、家族内エンパワメント法に多くの学びと示唆を与えている。

家族内エンパワメント法の具体的な焦点とその技法は以下のとおりであり、援助専門職は、そ

の技法に精通することが望まれる。その要件とは、家族リソースの肯定的要件に注目すること、家族の問題解決に対する気持ちと動機を支援すること、家族の問題解決能力を増進するといった三点である (Hepworth & Larsen, 1993; シメオン, 1997)。

家族内エンパワメント技法 1 : 家族のリソースを探求する

課題を抱えている家族が、持っている肯定的な潜在能力に注目することは、重要である。問題解決の最初のステップは、困難な生活状況にもかかわらず、真摯に課題と取り組もうとしている家族のエネルギーを大切に、それを積極的に引き出すことである。すなわち、家族内の葛藤状況を第三者に相談しようという勇気、社会的な援助を受けようという気持ち、不安や苛立ちなどの否定的な感情を持ちながらも、相対立する家族メンバーを思いやり、気遣う姿勢に共感することである。

家族メンバーそれぞれが持っている特性や豊かな人的ネットワークも見逃すことができない有効なリソースである。互いの特性を認めあい、それを効果的に、問題解決に向けて役立てる必要がある。援助専門職は、家族メンバーの否定的な側面に注目しがちであるが、この否定的な特性は、別の視点から見れば、反対に肯定的な要素を含んでいる場合も多い。家族メンバーの否定的な特性を肯定的に評価できるようなゆとりを家族メンバーのなかに喚起することは有意義である。また同時に、家族メンバー同士のセルフエスティーム感を、こうした共感的な家族内コミュニケーションをとおして、喚起することも忘れてはならない。このように、一連の家族内人間関係は、家族メンバーそれぞれの自信と成長を豊かに育むのである (Hepworth & Larsen, 1993, pp.319—320)。家族メンバー相互の肯定的な評価は、家族の成長に欠かすことのできない潤滑油なのである。

家族内エンパワメント技法 2 : 家族の情緒及び動機を探求する

家族内エンパワメント法の第二の技法は、家族メンバーの生活上の問題に対する気持ち、あるいは問題解決に対する動機を探求し、それを促進させることである。援助を求めてくる家族メンバーの多くは、家族機能に課題を抱えている家庭環境のなかで成長している。また、感情表現が極端に制限されがちな生活環境でもあり、情緒的な交流も極度に偏っている場合が多い。感情表現が制限されたり、体験している感情を率直に表現することを禁止される生活環境は、極度のストレス状況を生む (Sheafor, Horejsi, and Horejsi, 1994)。このような場合には、特に家族メンバー内での心の交流を育む努力が必要である。喜びや悲しみを分かちあえる家庭環境づくりが、援助専門職の役割である。

家族はそれぞれ家族特有の感情認知及び表出に関する独自のルールを持っている。家族療法では、こうした独自のルールを尊重しつつも、このルールがより効果的に機能するように、家族を援助するのである。以下がその具体的な手順の一つである。

(1) 家族が体験した過去の出来事、現在の出来事、及び将来の出来事を絵にする :

- ① 困った出来事

- ② 悲しかった出来事
 - ③ 楽しかった出来事
- (2) 絵にした出来事に題名をそれぞれつける
- (3) それぞれの絵を互いに見せあい、「今ここで」の気持ちに焦点を当てながら、表現しあう
- (4) 家族メンバーそれぞれが、お互いに気持ちに焦点を当てながら、他のメンバーが体験した出来事について振り返る

家族メンバーの出来事に対する感情の認知力及びその表出力を育むことが、家族内エンパワメント法の第二の技法である。

家族内エンパワメント技法3：家族の問題解決能力を探求する

人間は日常の生活で、さまざまな生活課題や問題と出会い、その課題や問題を解決している。家族が直面している課題を効果的に解決するには、家族メンバーの協力と具体的な問題解決能力を育成する必要がある。家族の問題解決能力に深く関連している事項とは、家族のコミュニケーション能力、家族内葛藤に対する対応能力、ストレスを緩和・統御する能力、家族の意志決定能力などである。

問題解決能力を促進するには、いろいろな方法が考えられるが、家族メンバーが過去及び将来的に直面しそうな課題を選定し、それを想定したり、あるいは振り返ったりして、体験的に解決方法の可能性を探求することは意義深い。家族メンバー間の信頼と協力関係のもとに、以下の要領で課題を設定し、その実体験の機会を豊かに家族に提供できるように努力する必要がある (Hepworth & Larsen, 1993)。すなわち、

- (1) 家族メンバーの問題を互いに認識しあう
- (2) 家族メンバーの問題を分析し、それぞれのニーズを互いに明確にしあう
- (3) ブレーン・ストーミング法を駆使して、解決可能な方法を互いに出しあう
- (4) 家族メンバーのニーズを考慮しながら、それぞれの解決方法を互いに検討しあう
- (5) 家族メンバーが選択・決定した方法を用いて、問題解決の過程を体験しあう
- (6) 家族メンバーの問題解決の試みを共に振り返る

家族メンバーのこのような体験は貴重である。この体験をとおして、家族内のコミュニケーション能力をはじめ、家族メンバー間の協力や信頼関係、絆、団結、さらには家族それ自身のセルフエスティーム感が増進されるのである。社会との関係性や社会参画への積極的な意欲と動機は、この家族内体験によって培われるであろう。

2) 家族エンパワメント・ステップII

家族＝家族間支援・交流エンパワメント法の展開過程：ネットワークアプローチ（精神障害者の家族を支援するための社会技能訓練法：SST）からの学び

家族＝家族間支援・交流エンパワメント法とは、家族＝家族同士が持っている有効なりソース

を認知、変容、育成することである。また、家族＝家族間の情緒及び動機をいろいろなプログラム活動をとおして、豊かに育むことでもある。前述のように、家族＝家族間の問題対処技能を育成することも家族エンパワメントの重要な課題の一つである。セルフヘルプグループは、こうした課題を実現するための一つの方法である。より具体的には、家族のためのセルフヘルプグループといったネットワークを生み育てるプロセスをとおして、互いが持っている有用な情報網を紹介しあったり、具体的な問題解決の方法を相互に学びあったり、信頼に基づく交流をとおして、情緒的な安心感と安寧感を共有できるように支援できるのである。

セルフヘルプグループは、近年、最も注目されている支援・交流グループの活動である。このように、さまざまなニーズを持った家族同士の支援・交流グループは、精神保健福祉や障害者福祉分野をはじめ、児童・家族福祉領域においても幅広い支持を得てきている。日本でも、アルコール依存症の家族会、ひとり親の会、不登校児の親の会、小児癌の子供を支援する親の会、精神障害者の家族会など具体的な活動団体として認知されつつある。以下その活動内容を精神障害者の家族会などの活動から学ぶことにする。

精神障害者の家族会の支援・交流活動の展開にはいろいろな方法が存在するが、以下のように要約できる。用いられる技法は、グループワーク技法である。すなわち、セルフヘルプグループに参加する家族は、家族＝家族間同士の小集団を活用し、相互の交流をとおして、有効なリソースとしての各種の情報を集め、その家族に適した情報を活用しつつ直面している家族問題を解決していくのである。また関連する問題に対する情緒的な交流及び具体的な問題解決のための技法についても、この交流活動をとおして学ぶことができるのである。より積極的には、グループ参加者自身が団結、共同して、この活動を社会的貢献活動の域にまで高められるように、援助専門職は家族会の活動を支援する必要性も出てくる。家族会を組織したり、その活動を具体的に展開するためのネットワーキング過程とは、以下のとおりである（全国精神保健相談会, 1992；東大生活技能訓練研究会, 1995；鈴木&伊藤, 1997）。なお、家族会を中心とするネットワークを活性化するための技法は多様であるが、家族＝家族間の支援・交流活動をより豊かに促進するための技法も、基本的には、家族＝家族間ネットワークが潜在的に内包している三要件に関連している。この三要件とは、家族間同士が持っているリソースを活性化すること、家族間同士が抱えている気持ち及び動機を共感しあうこと、家族間同士が持っている問題解決能力を共有しあうことである。

家族＝家族間エンパワメント技法 1：家族間同士が持っているリソースを探求する

精神障害者が抱えている課題は、今日の複雑な社会状況を反映して、その様相は複雑であるが、最も必要とされる支援は、精神疾患に関する家族メンバーによる理解であろう。精神疾患の予後は、患者と家族メンバーの関わり方に左右されるともいわれている（前田, 1995）。安定した家庭環境こそが、患者の生活適応には必須である。患者が安心して日常の生活を遂行できる家庭環境を創造できるように家族同士が支援しあうことが、家族会の最大の目的であろう。家族は、家族会の活動をとおして、精神疾患及びその治療方法の理解、在宅でのケアと生活、患者の就労や

友人関係、社会的な制度や資源など、いろいろな情報を交換しあい、日常の不安やストレス状況を緩和できるのである。家族会のこうした有効なネットワークリソースを基礎に、家族自身を持っている潜在的なエネルギーを認知できるように支援することも必要である。リソースエコマップの作成は、その一つであり、その内容が視覚的にも認知的にも容易に確認できる方法である。

家族療法の技法に関する項でも述べたように、患者自身が持っているリソースに気づくことが重要である。患者自身が持っている力強さ、潜在能力など、成長する患者の日常生活を見守る姿勢が、家族には必要である。否定的な患者理解の思考パターンを肯定的な視点から理解できるように支援する必要がある。家族会への参加メンバー同士が、こうしたリソースに積極的な関心に向け、それを効果的に活用できるように、互いに共感しあい、知識や技術を学びあう機会を保障するのが、こうした家族会の目指すところなのである。

家族＝家族間エンパワメント技法 2：家族間同士が抱えている気持ち及び動機を探求する

同じような課題を持っている家族間同士が互いに集う活動には意味がある。問題解決に向けて、共に課題の意味を考え、関連する知識や解決技能を学びあう活動は有意義である。この豊かな学びの機会をより活性化させるための潤滑油が、活動参加者である家族間に育まれる心の交流であろう。直面している大きな課題に対する家族の気持ちの揺れを互いの経験と英知を分かちあう機会をとおして、相互に支援できるサポート環境は、精神的疾患を持たれている患者のケアに当たる家族メンバーの力強い心的エネルギー源となりえる。

家族問題に対する気持ちの整理や調整は重要である。特に現実状況の認知と受容には、かなりのエネルギーと忍耐が要請される。その意味においても、相互交流の場をとおして、問題に対する気持ちを表出し、信頼感を集団内に築くことは不可欠である。家族会の支援的環境こそが、問題に対する、悲しみ、不安、苛立ちなどが、より安心した状況で表出できる場を保障してくれるのである。このような体験をとおし、家族会の参加メンバーは、家族の将来展望を描くことが可能となる。彼らの喜びや安寧の気持ちは、こうした将来展望から導きだされるのである。

家族＝家族間エンパワメント技法 3：家族間同士が持っている問題解決能力を探求する

患者自身が持っている問題解決能力に気づくこと及びそれを引き出すための技法を学ぶことも重要である。患者自身が賞賛される喜びの機会を多く提供することが必要であるにもかかわらず、日常生活の煩雑さによってこうした状況を創造できずにいることが多い。患者との接触を適度に保つ努力は有効であろう。食事のための買い物、食事の準備や後かたづけ、部屋の掃除、洗濯やアイロンかけなど日常の細々とした生活に関する仕事を共に、できることから始める。成功体験を患者に体験させることをとおして、患者は自分自身の能力や人間関係の喜びを知るようになる。自信とエスティムを促進するための努力は不可欠である。

家族メンバーが最も困難を感じる作業の一つは、このような患者との日常的なコミュニケーションの取り方である。誠実で温かなコミュニケーションは、患者との人間関係をより心地よいものにする。患者を買い物や食事に誘うことや患者を誉めるといったごく日常的な触れ合いをはじ

め、友人関係や余暇、外出、投薬や疾患といったことなどを気軽に話せるためのコミュニケーション技能を身につけられるように家族会の活動場面を利用することも可能である。家族会などにおける家族を対象とする生活技能訓練の活動プログラム（SST）は、その有効な実践として注目されてきている（前田, 1995；前田, 1998）。

家族会に参加している家族が、その居住する地域社会とのスムーズな人間関係を築いておくことも、重要な課題である。友人や知人から患者の病状を聞かれた時の対応技法、患者の病状を医療専門職に尋ねる方法、冷静な対応が求められる際の対応方法を身につけておくことは、意義深い。精神障害に対する地域社会の理解は、必ずしも十分であるとは言い難い。むしろ多くの偏見や差別が存在しているともいえる。地域住民との信頼を築くための方法とは、彼らとの十分なコミュニケーションをはかることである。今日の援助専門職には、家族同士の個人的なレベルでの交流を基点とし、家族会や患者本人同士によるネットワーク交流の機会を豊かにする活動能力が不可欠となっている（全国精神保健相談会, 1992；前田, 1995；前田, 1998）。

精神障害者の家族会を中心に、セルフヘルプグループの意味と役割を紹介してきたが、その最終的な目標とは、共通の問題あるいは状況下にある人々が、相互にサポートしあい、互いの問題状況を解決するための支援をすることである。家族会などのネットワーキング活動に参加する家族は、そのこと自体すでに、直面している家族課題の解決に対する強い動機を持っている。援助専門職は、こうした家族が持っている潜在性を社会のものとするために、すなわち、家族＝家族支援・交流ネットワークが持っている活動能力を社会福祉の貴重なリソースのレベルにまで育み、促進する必要がある。福祉援助プログラムの利用者は、利用者としての役割を果たすのみではなく、より積極的には、福祉資源の有能な提供者でもあることを忘れてはならない。

3) 家族エンパワメント・ステップⅢ

家族の社会的・政治的エンパワメント法の展開過程：ソーシャルアクション・アプローチからの学び

これまで、家族をエンパワーするための技法を、家族内システム及び家族＝家族間システム同士の変容に焦点を当てて述べてきたが、ここではその領域を家族システムを取り巻く社会・政治システムの変容を意図したエンパワメント技法を紹介する。すなわち、マクロレベルの家族エンパワメント法であり、社会福祉制度との関連における家族エンパワメントの技法である。

家族の社会的・政治的エンパワメント法とは、家族が持っている社会的・政治的リソースに気づくとともに、それを変容、育成することをはじめ、現在の福祉政策や制度に対する思いを、変容、育成することである。政治や社会制度上の問題に家族の視点を導入することは貴重である。福祉活動を家族の視点に立ち、家族が必要としている支援ニーズにより沿ったかたちにするための活動は、複雑化する21世紀の社会では特に不可欠である。援助専門職の役割は、この出会いをとおして、家族が抱えている生活課題をより社会的な事象とするための支援を家族とともに積極的に展開することでもある。

家族を社会的・政治的にエンパワーすることは重要である。公的な社会・政治システム上の課

題や矛盾に市民的なレベルから関心を持ち、地域コミュニティの生活環境を組織的に変革する努力は意義深い（コックス & パーソنز, 1997）。家族の社会的・政治的エンパワメント法の基本は以下のとおりである。

家族は地域社会を構成する重要なメンバーである。またこの社会が提供するさまざまな福祉サービスプログラムの重要な利用者でもある。福祉サービスプログラムの変容や変革には、彼らの声と積極的な参画の姿勢が不可欠である。福祉援助にたずさわる援助専門職は、こうした現実を見極め、積極的な住民参加のための意欲と地域連帯の組織化に努力すべきである。彼らが必要とする、家族の社会的・政治的な力とその組織化を育むための技法とは、以下のとおりである。

社会的・政治的エンパワメント技法 1：家族の社会的・政治的リソースを探求する

家族が、潜在的に持っている、社会的・政治的な能力を認識し、地域コミュニティの社会的なリソースを効果的に創造する必要性が叫ばれているなかで、今日、多くの家族は、自分たちには、社会的・政治的な能力が、備わっていないと実感している。また、こうした能力が必然的に内包している「効力」及び「パワー」のリソース源であるとの認識も薄いといえる。有権者の政治離れが強調されて久しいが、われわれの政治に対する関心は、極めて低い。問題の要因は、いろいろ考えられるが、こうした状況下で、援助専門職には、家族それ自身が潜在的に持っている、社会的・政治的な関心と能力を引き出すための努力が要請されている。

緑を守ろう運動、住み良い街づくり運動などをはじめ、いろいろな活動が、市民レベルで実施されつつある。市民レベルでの福祉分野での活動も盛んに展開されるようになってきた昨今、援助専門職には、こうした活動の芽を育む努力が、これまで以上に求められている。このような民間ベースの活動の多くは、地域社会における有効な社会資源となりうる可能性を十分に秘めている。民間レベルでのより身近で、信頼感あふれる支援リソースこそ、われわれ利用者が求めているサービスなのである。地域コミュニティの豊かで、より親しみのあるリソースの開発には、市民レベルでの関わりが必須であり、これを支援する援助専門職の果たす役割も極めて大きい。

地域社会の社会的リソースに関連する検証も重要である。福祉サービス利用の権利がありながら、何らかの理由でその利用が制限される家族も存在する。長年の生活保護申請にもかかわらず、十分に審査されずに、その対象から除外されるケースも多い。また、介護保険法が 2000 年 4 月より導入、実施されているが、審査基準が明確に規定できない要素を多分に含む審査過程上の矛盾やその手続き上の複雑さ等、サービス利用者家族にとって必ずしも利用しやすい制度となっていない。第三者機関による不服申し立て制度の充実や再構築をはじめ、市民レベルからの真摯なアプローチが切望されている。高齢者介護を担う家族同士が集い、こうした社会制度や政策上の矛盾点に関心を持ち、その課題を市民的レベルで解決するための努力は恒常的に不可欠であり、そのための社会的・政治的な解決能力を備えた市民レベルの組織団体が必要となっている。援助専門職は、このような調停及び調整能力を学ぶための活動プログラムも視野にいた、政治的な力量を備えた組織作りに努力すべきである。

地域社会との関連性において、福祉サービス利用者としての家族及び家族会などは、どの政治

家にもまして、地域との親和性は高い。家族の持っている、地域社会に関する知識や見識、地域内葛藤や課題に対する願いや思いを、その問題解決のために導入することは重要である。地域社会における問題の対象者は、その課題に直面している家族ではあるが、他方、その地域が提供している社会資源のよき活用户も、またその家族なのである。社会的なリソースを家族や地域住民のニーズと合致させるためには、こうした家族を優れたアドバイザーとして、効果的にその社会・政治システムの中に巻き込むことも効果的なのである。

社会的・政治的エンパワーメント技法 2：家族の社会的・政治的情緒及び動機を探求する

社会的に脆弱な立場に置かれている家族は、社会的・政治的な力を持っていないと感じる傾向にある。社会的・政治的無力感、コミュニティ意識の沈静化、希薄化、一体感の喪失と連動する。無力感の解決は大変重要な課題なのである。援助専門職は、家族を中心としたコミュニティメンバーが、社会的・政治的な活動に対して強い信頼感と親密性などが抱けるように支援する必要がある。

地域社会が、直面している課題を、その当事者あるいは援助専門職のみで解決することはできない。地域住民及びそこに居住している家族同士の連帯と連携が必須である。コミュニティ集団としての家族が内包している潜在的なパワーを喚起できる環境に注目すべきである。個人的な力が果たす役割は重要であるが、個人の力が集約された際に蓄積される、連帯の力はそれ以上のパワーを発揮する。家族同士が育む組織力は、意識的な連帯感となり、問題解決のための強力な起爆剤ともなりうる。このような連帯感、福祉援助プログラム活動の変容と改革を大いに促進するものなのである。

社会的・政治的エンパワーメント技法 3：家族の社会的・政治的問題解決能力を探求する

社会的・政治的な能力とは、住民同士の声を的確に聞く能力、それを一つに結集する能力であり、コミュニティ変革を促すための積極的な力であるといえる。具体的には、法律、政策、福祉サービスプログラムに関する分析能力と変容能力を指す。

ヘッパースとラーセン (Hepworth & Larsen, 1993, pp. 506—507) は、示唆に富むソーシャルアクションの技法を紹介しているが、こうした技能は、社会的・政治的な問題解決のプロセスにおいては欠かすことのできない基本的な要件でもある。

- (1) 社会・政治的な課題と関係の深い福祉機関との連携をとる技能
- (2) 社会・政治的な問題に関する調査委員会にアピールする技能
- (3) 法的な措置を取る技能
- (4) 調査研究からの情報を分析、評価する技能
- (5) 関連するコミュニティ団体を教育する技能
- (6) サービスユーザーのグループを組織する技能
- (7) 嘆願書を作成する技能

これらの能力及び関連する技術は、援助専門職、特にソーシャルワーカーが、必要とする技能である。援助専門職は、ソーシャルアクションに関連する援助技法を積極的に開発するとともに、地域社会が直面している福祉実践及び政策課題を解決するために努力する必要がある。また、こうした能力や技術を具体的に学ぶための機会を積極的に組織し、効果的に提供するための市民レベルでの教育プログラムを開発しなければならない。福祉援助のプログラムをより革新的にするための努力は、こうした技能を基礎に構築されるのである。表 2 は、エンパワメント理論の重要な六つの原則である（参考資料：注 2）。歴史的には米国のジェーン・アダムスやバーサ・レイノルズらのソーシャルワーク実践及びその専門教育に連動していると言える（Langer, C.L. & Lietz, C.A., 2015）。

これまで述べてきたように、家族を中心とした集団による社会的・政治的な問題解決型の組織を創造的に育成することは、地域社会が抱えているさまざまな問題を解決するための究極的課題である。21 世紀を成熟した福祉社会にするための努力が始められているが、家族を中心とする人間社会が潜在的に内包しているリソース、変化しようとする気持ちと動機、豊かな問題解決能力に注目した新たな実践アプローチが希求されているのである。エンパワメント理論に依拠する家族ソーシャルワーク実践は、少子高齢社会における介護問題、子どもの貧困問題、ライフワークバランス等の多様な福祉課題に直面する日本社会における今後の家族支援のあり方を明示している。

参考資料

（注 1）

表 1 エンパワメント理論の主要概念

自己効力感	エンパワメント過程がもたらす成果
集団意識	エンパワメントは、集団的な所属の感情を確証する。
自己非難の縮減	システム的な障壁こそが問題の根本であり、人間そのものではないということ を理解・認知すること。
変化への道は、われわれ一人ひとりが担う個々人の責務である	問題の一端でもある人間は、その問題を解決に導く人間でもある。
複眼的先見性 及び洞察力	社会的抑圧を見極めるためには、複眼的で、グローバルなレンズが必須である。 また、われわれは、その最も広範なネットを駆使し、いかなる少数派の意見にも 関心を向けつつ、かつ同種の関心事を共有できる人びとも繋ぐことができる
二元的パースペクティブ	人間と環境との両者への焦点化
実践力と行動力	理論に基づいた行動
抑圧の状況、風土	抑圧を増大させ続けることを容認する風土や構造

資料：Langer, C.L. & Lietz, C.A. (2015) *Applying Theory to Generalist Social Work Practice*.

New Jersey: John Wiley & Sons, Inc., p.172.

(注 2)

表 2 エンパワメント理論の原則

原則 1 : 個人的 (パーソナル) とは政治的である (個人的な問題は、社会的な問題であり、かつそれは政治的な問題でもある)。	もし誰かが抑圧あるいは差別に苦しんでいるなら、他の誰かも同様のリスクの下にある。
原則 2 : 疎外化 (marginalization) はシステムテックである。	経済的・政治的な力は、システムテックに一部の人間を抑圧し、抑圧の風土ともいえるある環境を生み出す。
原則 3 : 個人の心理社会的変容は、より大きな社会システムレベルでの変化をも生み出す。	個人レベルの変容は、より大きなシステムにおける変化を生み出す際にも重要である。
原則 4 : エンパワメントは、人間が尊厳と尊敬を持って処遇される時のみ生起する。	ソーシャルワークの中核的価値、すなわち有用感、尊厳、社会・経済的正義といった価値観は、エンパワメントの原点である。
原則 5 : ヒエラルキーのないモデルこそが、変化を醸成する。	ヒエラルキーは、現存する不平等を増幅するリスクとなる。
原則 6 : エンパワメントはソーシャルアクションへと続く。	ソーシャルワーカーは、変化を生み出すために多様なレベルで介入をすることができる。

資料 : Langer, C.L. & Lietz, C.A. (2015) Applying Theory to Generalist Social Work Practice.

New Jersey: John Wiley & Sons, Inc., p.174.

参考文献

1. 日本の文献 :

- コックス, E.O. & パーソンズ, R. J. (1997) 『高齢者エンパワーメントの基礎』 (小松源助監訳)
相川書房
- 小松源助 (1995) 「ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの動向と課題」
『ソーシャルワーク研究』 Vol.21 No.2 Summer 4—10
- 佐々木政人 (1996) 「現代日本の家族問題と家族ソーシャルワーク」 『子ども家庭白書』
川島書店 152—167
- 佐々木政人 (1999) 「家族エンパワメントの実践技法」 『エンパワメント：実践の理論と技法』
中央法規 112—136
- 佐々木政人 (2012) 「現代社会と子どもの成長・発達」 『児童家庭福祉論』 全国社会福祉協議会
40—45
- シメオン, J. D. (1996—1998) 京都国際社会福祉センター 研修講座「アドバンスト課程」の
講義
- 鈴木丈・伊藤順一郎 (1997) 『SST と心理教育』 中央法規出版

- 東大生活技能訓練研究会 (1995) 『わかりやすい生活技能訓練』 金剛出版
- 前田ケイ (1995) 「よい家族関係のための S S T」 『わかりやすい生活技能訓練』 金剛出版
113—144
- 前田ケイ (1998) 「S S Tのグループ実践におけるアドボカシーとエンパワーメント」
『社会福祉研究』 第 72 号 19—25
- 全国精神保健相談会 (田中英樹他) (1992) 『精神保健「家族教室」』 萌文社

2. 海外の文献：

- Gutierrez, L. (1990) Working with Women of Color: An Empowerment Perspective.
Social Work, 35, 149—153.
- Hepworth, D.H., & Larsen, J.A. (1993) Direct Social Work Practice (4 th edition).
California: Brooks/Cole Publishing.
- Langer, C.L. & Lietz, C.A. (2015) Applying Theory to Generalist Social Work Practice.
New Jersey: John Wiley & Sons, Inc.
- Morales, A. T. & Sheafor, B.W. (1995) Social Work (7 th edition).
Mass.: A Simon & Schuster
- Sheafor, B. W., Horejsi, C.R., & Horejsi, G. A. (1994) Techniques and Guidelines for Social
Work Practice (3 rd edition). Mass.: Allyn and Bacon.
- Sheafor, B. W., Horejsi, C.R., & Horejsi, G. A. (2015) Techniques and Guidelines for Social
Work Practice (10th edition). New Jersey: Pearson.
- Solomon, B.B. (1976) Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities.
New York: Columbia University.
- Toseland, R.W. & Rivas, R.F. (1995) An Introduction to Group Work Practice (2 nd edition).
Mass.: Allyn and Bacon.
- Whittaker, J.K. & Tracy, E.M. (1989) Social Treatment (2 nd edition).
New York: Aldine De Gruyter.

本研究は、以下の論文に依拠している。

- 佐々木政人 (1999) 「第 7 章 家族エンパワメントの実践技法」 『エンパワメント：実践の
理論と技法』 中央法規 112—136